

## 留学生の アルバ仲

第2次世界大戦で敗戦国となつて以来、オーストリアはスイスや北欧諸国と並ぶ永世中立国としてヨーロッパで特殊な政治的位置を占めている。東西の政治地図が思いもかけない形に塗り替えられた今日この頃、今までは西欧自由圏諸国の一番東端でしかなかった地理的短所を、今後どう長所として展開・アピールしていくかが大きな課題となった。

つい最近までは、もし将来ヨーロッパに戦争が起ころうものなら東西諸国の接点として真っ先に戦場の最前線になるだろうと思われていた土地である。人口800万人にも満たない小さな国が生き延びていくためには「永世中立」という策以外には考えられなかった。1955年の主権回復調印の際にもし中立を選択しなかったら、オーストリアは東欧圏の一国となっていたかもしれない。

なお、永世中立国とは主に軍事に関する政治形態だけの話であ

り、西欧諸国、つまり資本主義社会の一角であることには変わりがない。

この中立政策は現在も忠実に守られ、ジュネーブやニューヨークなどに集中していた多くの国際機関をウィーンに誘致し、それと同時に全世界からの政治亡命者に対しても広く門戸を開いている。



トランペットでソウルのさわりを



こちらはかなりの腕を持ったバンド

ウィーンが国際都市としての名を掲げ、ここに世界各国から人々が集まる背景には、単に観光地としてだけの魅力以外にこういった背景がある事も見逃せない。

いきおい当地の学校で勉強に励む学生の面々も、国際色豊かだ。ちなみにウィーン国立音楽大学の学生の国籍は50カ国以上もの数にのぼる。

その中で一番多いのは、同じドイツ語を母国語とするドイツ人。その次が何と日本、韓国、台湾の東洋3国だ。

最近日本人が裕福になったお陰で日本からの観光客もどつと増えたが、ウィーンで勉強する日本人学生の数もなかなかのもの。音楽に限らず、美術、建築、ドイツ語など各方面にわたる勉学の徒がこの地に居を構え、生活している。

昨今の日本人留学生は、数多い外国人の中でも恵まれた生活を送っている。個人差はあるにせよ、爪に火をともしような生活を強いられている苦学生はまず皆無だろう。しかし日本人以外の学生の中では、非常に経済的苦労をしながら勉強を続けるケースも多数見受けられる。

もともと西洋人の慣習では、わが子が外国で留学生活を送る場合でも、そのために特別な仕送りを

する事はあまりない。送金するとしても必要最少限の経費だけだ。

優秀な学生には奨学金を得るチャンスもあるが、それでもある程度のお金は自力で稼ぎ出さなくてはならない事態も起こり得る。学生寮に住み、学生食堂だけで食事をしている分にはそれ程ではなくとも、音楽専攻の場合などでは楽譜やコンサートのチケットをはじめ、楽器に必要な消耗品の数々など、いろいろな出費が必要になってくるだろう。

ところで西欧諸国で学生証の發揮する効力は実に偉大だ。水戸黄門の持つ葵の御紋の印籠とまではいかずとも、相当の優遇を期待できる。ただ、経済的に得をするとは言っても出費は出費、学生証は打出の小槌ではない。小遣い金を稼ぐには、やはり何か身体を使って行動しなくては…。

てっとり早い方法のひとつに「歩行者天国での簡易ショービジネス」がある。器楽でも、歌でも、あるいは民族色豊かな踊りでも良い。自分の気の向いた時にできるし、その経験を通じて人前でアクションする、という度胸をつける訓練にもなる。

足元に適当な容器を置いておくと、感心した歩行者がチップを入れてくれる。この容器には前もつ



アコーディオンの演奏を犬がおとなしく聴いている

オーボエのちょっぴり物悲しい音が回りに響きわたる

フルートの二重奏

て何かしか「おとり」の小銭を入れておくのがコツだそうだ。

熟練者の場合、波にのると一日で数千円くらいは楽に稼げるらしい。ただし調子の悪い日も当然あり、一生懸命頑張ったのに数百円という事も。特に新参者の場合、恥ずかしげに隅っこの方に引っ込んでいたりすると、なおさらだ。

ただしこの学生アルバイトも、厳密に見れば法的には禁止された不法行為である。外国人の場合、まずこの「労働」に関する公式の許可を得ていない事。つまり「不法労働」だ。

そして「脱税」も。これで得た収入を税務署に報告して、しかるべき所得税を払うほどの奇得な御仁はまずいないだろう。

もともとウィーンのおまわりさんは幸いそれ程ヤボでもなく、あまり大々的にやりさえしなければ片目をつぶってくれる。

以前プロ顔負けのアトラクションを連日興行して半ばウィーンの名物になりかけた若者が右の理由で警告を受け、新聞種になった事がある。たった一人で歌はもちろんハーモニカ、ギター、大太鼓、シンバル、カスタネット、タンブリンその他の楽器を同時にあやつる、という名人芸ではあった。